

## 平成 30 年度都立看護専門学校社会人入学試験小論文課題

次の文章は、がんになり不安を抱えた患者とその家族に、対話を通して支援する「がん哲学外来」を開設している病理学者が書いたものです。これを読んで設問に答えなさい。

人間は、自分の寿命に気づかない生き物です。病理解剖を何度繰り返しても、自分が明日死ぬとは思えない。しかし人間は誰でも必ず死ぬ。その事実がわかっていながらどうしても「明日自分が死ぬ」とは思えません。

元来、人間とはそういう生き物です。

ところががんになると様子が違ってきます。突然、自分の死がリアルに感じられるようになります。実際はがんになっても半数の人は治りますが（発見が3年早ければ7割は治るとされる）、「がん＝死」という凶式が頭をよぎります。そして人は、生きる基軸を探し求めるようになります。

「自分は何のために生まれてきたのか」

「残された人生をどう生きたいのか」

「そのために自分は何をすればよいのか」

あるときから私は「死しても生きるとはどういうことか？」を考えるようになりました。「死から生を見つめる」のが私の仕事だったからでしょう。

そして私はこう考えるようになりました。

人間には一人ひとり、その人に与えられた役割や使命がある。（中略）

生後2時間で赤ん坊を亡くした両親と10年後に会う機会がありました。そのとき両親は話してくれました。

「あの子が生まれてきたからいまの私たちがいます。あの子の分も楽しく、素敵な人生を送りたいと思っています。

いまでもときどきあの子のことを思い出して二人で話すことがあるんですよ。とても短い人生でしたが、いまではあの子にはあの子なりの役割があったと思っています」

どんなに短い人生であっても生きている限りは一人ひとりに役割がある。大事なことは、それに気づけるかどうかです。

人生の役割についてお話をすると、ときどきこう尋ねられる方がいます。「先生ご自身の人生における役割は何でしょう。よかったら教えてください」

一言で答えられたらよいのですが、そう簡単ではありません。

たくさんの死に向き合ってきた私ですが、いまだ、日々、自分の役割を求め続けています。生きながら、歩きながら、探し続ける。

それが人生というものではないでしょうか。

出典：樋野興夫著（2017）「明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい」株式会社幻冬舎

（設問）

著者が伝えたいことを簡潔に要約した上で、「人生の役割や使命」について、あなたの考えを1,200字程度で述べなさい。